様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　６月　９日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５２０１３６
研究課題名（和文）　「辺境からの文学史」の研究

研究課題名（英文）　A history of ancient literature from the viewpoint of “the Border”

研究代表者
多田　一臣（TADA KAZUOMI）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：５００９２２６８

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の東西の辺境の側から、古代文学史の新たな構築を目指すことを目的としている。成果としては、東の側では、まずは、『万葉集』の全訳注である『万葉集全解』全７巻の刊行を挙げたい。東国の歌である東歌および防人歌に完全な注を施し、また東歌、防人歌の文学史的意義をあきらかにした。東国が中央にとって、エキゾチシズムと結びついた異郷であることを明らかにした。西の側では、九州風土記の成立について、シンポジウムを立案・実施し、新たな知見を提示した。

研究成果の概要（英文）：A purpose of this study is to elaborate a plan in a history of literature from the East-West remote sides of Japan in the ancient times. About an east border, I completed an explanatory note of "Manyoshu tanka collection". I put a complete note for the Eastern verse that was the song of the eastern country and a tanka composed by soldiers called "Sakimori" and clarified the history of literature-like significance of Eastern verse and the tanka composed by "Sakimori". I made clear that an eastern country was a foreign country tied to exoticism for the people of the capital. Furthermore, I held the symposium over the formation of "the Kyushu topographical record" and got big result.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：古代文学、文学史、辺境

１．研究開始当初の背景

研究代表者である多田は、これまで東アジア諸地域の研究者と、『万葉集』や平安時代の物語や説話に関する共同研究を行い、ベトナム、韓国を含むアジア漢字文化圏における比較文学的考察を通じて、東アジアの中の古代文学のありようを考察してきた。その研究を進める過程で、日本の内部においても、東

西の辺境の地域を視野に入れることなしには、その総体を正しく把握することはできないと考えるようになった。

辺境は定義の難しい概念ではあるが、上代文学会のシンポジウム担当理事として、二年度にわたり「「日本意識」形成をめぐって」「古代文学にとって東国とは何か」と題するシンポジウムを企画し、「日本」という空間が、古代において、いかに認識されるようになったかを考察した。とりわけ東国像を明確にすることが、古代文学を正しく理解するためには欠くべからざる要件であることを視点であることを、後者のシンポジウムにおいて確信した。

また多田は、ヤマトタケル東征譚をめぐる論文「「記紀」に見るヤマトタケルの東征」を公表し、それらを通じて、東国の領域が少しずつ移動していく様態に着目し、そこからあらためて中央と東国の関係を考える必然性を痛感した。このことも、この研究を開始する大きな契機になっている。

また、一方で、多田は、論文「古代吉野論のために」を公表したが、その中で、吉野の地の特殊性が、そこに移配された南九州の土着勢力である隼人と深くかかわっていることを明らかにしたが、近年の記紀や風土記の研究が、隼人の存在をさほど重視していないことに気づいた。記紀の九州神話や九州風土記が、隼人の存在を無視しては考えられないことは当然であるにもかかわらず、それをいまだにきちんと組み入れた研究がないことに、大いなる疑問を覚えた。

いずれにせよ、古代文学を正しく把握するためにも、辺境からの文学史を構想する必要があることを痛感した。以上が本研究を開始する際の背景となった問題意識である。

２．研究の目的

本研究では、日本の東西の辺境の側から、古代文学史の新たな構築を目指すことを目的とした。具体的には、東の辺境としての東国のありかたを明確に意味づけ、さらには西の辺境としての隼人の文化の実体を、竹と鵜飼の問題を中心に考察することを目的とした。

前者においては、東山道と東海道との歴史的関係を探ることで、東国意識が記紀において相違していることの理由を探り、また、『万葉集』の東歌や防人歌、あるいは高橋虫麻呂などによって詠まれた東国の伝説歌にうかがわれる当時の東国観をあきらかにすることを目的とした。

また後者においては、隼人の文化のありかたを解明することで、記紀や風土記の神話体系がどのように構想されているかを探り、隼人がなぜ王権との深い系譜的つながりをもつのかをあきらかにすることを目的とした。

３．研究の方法

東西の辺境の現地調査（博物館、歴史資料館等）と資料収集をおこない、さらには多くの先行研究を参考にしつつ考察を深めた。

具体的には、２００７年度においては、アマテラス信仰のありようを、具体的に考察した。大隅正八幡の母子神信仰から、紀伊の日前国懸神社・伊太祁曽神社のアマテラス信仰につながる流れを、具体的な現地調査を踏まえつつ、検証した。その成果を、同年末の古事記学会例会において口頭発表し、参加者との討議をおこなった。

２００７～８年度においては、同時に隼人資料の文献的調査を行い、また薩摩・大隅半島における隼人の活動の実態を、関連博物館、資料館の資料踏査を通じて考察した。その成果展開の機会として、２００８年度に、「九州風土記」をめぐるシンポジウムを企画し、他の研究者との共同研究や意見交換をおこなった。

２００８年度は、さらに東国の調査をおこなった。東北歴史資料館における資料収集、また『常陸国風土記』関係の史蹟の踏査等をおこない、東国の実態についての有益な示唆を得た。またいくつかの学会での発表を通じて、意見交換をおこない、批判点を吸収するなどして、研究の精度を高めるなどした。

２００９年度は、まとめの年であり、この間ずっと執筆を続けてきた『万葉集』の全訳注である『万葉集全解』の刊行をおこなったため、これに全力を集中した。とりわけ、東歌・防人歌の注釈に、今回の調査結果を反映させるべく努力した。なお、その解説において、東歌・防人歌の新たな位置づけをおこなった。

以上が具体的な研究方法になる。

４．研究成果

国外への影響については、研究の性質上省略する。主要なものみに限定する。

（１）『万葉集』の注釈である『万葉集全解』全７巻を筑摩書房から刊行した。総計３５１４頁に及ぶ。この中で、東国を舞台とする東歌、防人歌についての詳細な訳注を施すことができた。また、その解説において、東歌、防人歌の背景の相違についても詳述した。

東歌は、東国の民謡に起源をもつ歌が大半をしめる。その意味で、東国の衆庶の声を伝えた歌と見ることは、必ずしも誤りとはいえない。だが、東歌は民謡そのものではなく、その背後には、中央の側からの何らかの文化的馴致があったと判断しうる。性愛のあけすけな描写など、東歌に特徴的な異土性は、むしろ中央の側の東国理解、そのエキゾチシズムの現れであったと解することができる。東国は、「都―鄙」の対立構造から除外された

第三の地域と見なされていた。東国独自と見なされる歌を集めるところに、国家を文化面においても統一的に把握しようとする、中央政府の意図があったと見られることを指摘した。

また、防人歌については、巻２０所収の８４首を中心に取り上げた。この防人歌は、天平勝宝７年（７５５）、諸国の部領使が進上した歌を、当時兵部少輔として防人交替業務に従事していた大伴家持が、取捨して採録したものであるが、どうやら防人制度の改廃を検討する資料として、組織的に収集された可能性が高いことを指摘した。天平２年（７３０）以降、防人制度は動揺を続け、停止と復活を繰り返す変転のただ中にあったが、防人歌は、防人たちの赤裸々な心情を伝える貴重な記録として、その制度運用の是非を判断する資料とされたらしい。当時、兵部省の長官は橘奈良麻呂であり、奈良麻呂の父は左大臣諸兄だから、諸兄から奈良麻呂を通じて、家持に防人歌収集の命が下った可能性が高い。その意味で、防人歌はたしかに東国の衆庶の声を響かせる歌歌ではあるが、異土性を強調することで中央政府の支配の広がりを示す東歌とは、あきらかに違った役割が期待されていたのではないかと指摘した。

以上は、独自な見解の提示であり、今後の『万葉集』研究、とりわけ東歌、防人歌研究に際して、必ず参酌されるべき成果を提供しえたと自負している。

（２）風土記研究会において「九州風土記を考える」と題するシンポジウムを立案・実施し、別府大学において、現地見学を伴う充実した大会を開催した。その成果を『風土記研究』３３号において公表した。九州風土記の甲類・乙類と『日本書紀』との関係を、『万葉集』を媒介とすることで、一定程度あきらかにしえたのではないかと考えている。最初期の風土記が、大宰府や中央官庁において、行政の参考資料として用いられていた実態をあきらかにしえたことも、大きな成果であると考えている。風土記をめぐる議論に、一石を投ずることができたと確信している。

（３）紫式部学会において、「東国の女浮舟」と題する発表をおこない、『源氏物語』宇治十帖の女主人公浮舟が、東国幻想を基盤として造型されていることを具体的に論じた。すなわち『万葉集』の東歌や高橋虫麻呂の作に見える東国の女のあけすけな性愛描写が、都人のエキゾチシズムともいうべき東国幻想の所産であり、浮舟もまたそうした幻想に支えられて、その人物造型がなされていることを文学史の問題として解き明かした。東国という辺境が、都という空間に対して、正負の二面的価値をもっていることをそこからあきらかにした。この成果は、『むらさき』４５輯に掲載されたが、すでにいくつかの具体的な反響を得ている。

（４）高岡市万葉歴史館において、「越中国守大伴家持」と題する発表をおこない、越中という北の辺境の国守として大伴家持が果たした役割を仔細に検討した。この成果は、『高岡市万葉歴史館紀要』２０号に掲載された。いくつかの新視点を提示しており、今後の家持の伝記研究にとっても裨益するところが大きいと考えている。

また、柿本人麻呂の近江への旅を取り上げた「「近江二首」を読む」を依頼によって『論集上代文学』に公表したが、これも大きくいえば、「都」と「鄙」の関係を扱っており、本研究の主題と大きくかかわるところがある。

（５）古事記学会において、「アマテラスの影」と題する研究発表をおこなった。日本の太陽信仰が、西の辺境に起源をもち、その東漸の過程が、アマテラス信仰の展開過程であることを具体的に指摘した。和歌山市の日前宮や伊太祁曽神社の独自なありようは、アマテラス信仰が、海辺の母子神の信仰と深くつながっていることを示唆する。大隅正八幡宮縁起の世界との比較を通じて、西の辺境からの視点をもつことがいかに重要であるかをあきらかにした。

（６）雑誌『文学』（岩波書店）の特集「八世紀の文学」の企画を担当し、その中で、八世紀が、西国世界（大宰府圏）と東国世界とを両極とする時代であることを鮮明にした。その座談会および論文「『歌経標式』から『古今集』へ」はその成果である。なお、論文「怕しき物の歌」は、辺境の果てに幻想される他界像について論じたもので、「辺境からの文学史」がいかに構築されるべきかの、一つの解答を示したつもりである。

以上が、その主要な成果だが、研究期間内には、これらを統合して、あるいはこれらを基礎として、古代文学史の総体を提示することができなかった。とりわけ、隼人の文化をめぐる問題は、現地調査を重ね、竹の文化と鵜飼の関係について、具体的な知見を得たものの、なお具体的な発表までには至らなかった。それはなお今後の重要な課題としたいと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）

① 多田一臣、越中国守大伴家持、高岡市万葉歴史館紀要、査読無（依頼論文）、21号、2010、pp.18-29

② 多田一臣、九州風土記を考える―『万葉集』から、風土記研究、査読無（依頼論文）、33 号、2009、pp.1-20

③ 多田一臣、「近江二首」を読む、論集上代文学、査読無（依頼論文）、31 冊、2009、pp.33-51
④ 多田一臣、東国の女浮舟、むらさき、査読無（依頼論文）、45 輯、2008、pp.4-11
⑤ 多田一臣、『歌経標式』の〈喩〉、『修辞論』（おうふう）、査読無（依頼論文）、2008、pp.169-183
⑥ 多田一臣、大伴家持の「歌日誌」、『万葉集を読む』（吉川弘文館）、査読無（依頼論文）、2008、pp.118-136
⑦ 多田一臣、景と心、古代文学、査読無（依頼論文）、47 号、2008、pp.2-8
⑧ 多田一臣、『歌経標式』から『古今集』へ、文学（岩波書店）、査読無（依頼論文）、9 巻 1 号、2008、pp.29-38
⑨ 多田一臣、怕しき物の歌、国語と国文学、査読無（依頼論文）、84 巻 12 号、2007、pp.11-21

〔学会発表〕（計４件）
① 多田一臣、古代日本人の時間意識、駒澤大学国文学大会、2009 年 12 月 6 日、駒澤大学
② 多田一臣、九州風土記を考える―『万葉集』から、風土記研究会、2008 年 9 月 6 日、別府大学
③ 多田一臣、アマテラスの影、古事記学会、2007 年 12 月 22 日、学習院女子大学
④ 多田一臣、『源氏物語』と東国、紫式部学会、2007 年 12 月 1 日、東京大学

〔図書〕（計１件）
① 多田一臣、筑摩書房、『万葉集全解』１～７、2009~2010、総計 3514 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
多田　一臣（TADA KAZUOMI）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：５００９２２６８

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：